



洋学文庫
文庫 8
C 269
5





泰西七金譯說卷之五目錄

由來不詳其可辨之法

精潔水銀法

製黑色ミ子ラトルモール法

製白ペルレピタート法

製赤ペルレピタート法

製黄ペルレピタート法

製緑ペルレピタート法



製猛升汞丹法 共三法

解猛升汞丹毒法

製甘升汞丹法

斯微天以所發明用水銀製梅毒病藥法

布連吉以所發明水銀製藥用法

殺水銀法

細末水銀法

塊凝水銀法 共三法 五日凝



用水銀製銀法

令塊水銀至可鑄造法

塊凝水銀又法

用鉛製水銀法 共三法

用本籍藥類去
今此水難至下殺去
...

泰西七金譯說卷之五

馬場貞由譯述

精潔水銀法

何に用ても水銀不潔にしてハ可なりさふ故に
先づ最初の水銀と精潔にする法を説く一其
法種々あり左の如し
第一 先づ皮の袋に入れ漉をへしこれにて荒

粗の塵埃の類悉く去ぶる

これにてハ唯表面の塵埃のみ去りて含有する
不潔の物ハ去らざるなり如何とあれハ前巻に
説く如く此は瀉和したる鉛錫ビスмут等
ハ共ニ皮より漏れ出つれハあり但し其眞偽の
差別ハ此の皮にて瀉をとれり知るべし偽製の
物ハ容易ニ皮より漏らす又漏れ出たる粒形眞
円ならず物ニ移さんとしてこれを動かさハ其

粒長く尾状となすなり
第二ニ鹽水酢焼酎硝石汁灰汁石灰汁等を用て
洗ひ灌ぐべし此れにて多分の穢物去り尚美麗
みななり又云

第三ニ鹽及び明礬の類にて揉むべし此他都て
乾燥の性あるものを用てしても良し
第四ニ最も精潔純粹なさんと欲せハ「トル
ト」に入れ口の所ニ水半分と入れたる器にかけ

置き以て徐々ニ蒸候をへし混和したる金石の
類都て重宝とて物ハ口トル上の底ニ留り獨り
純粹の水銀のこも多置きたる水中ニ聚るなり
斯の如くして精潔となりたるハ茶用及ひ其外
何ニ依らず用て甚と良し又銀朱となりたる水
銀ハ左の法を以て純精ニ好をへし
銀朱となりたる水銀一觔按前卷ニ所謂水銀
の便利となりたる細末ニ搗きられし石灰粉三觔
物の類あり

の又ハ鏡粉一觔ニ交ハ陶造の強き口トル上
の中三分の二杯満たし器ニ水半分を入き
れど其口の所ニかけ置きらしを口トル上へレ
上止の火按當て激し及ぶ大勢燃る上ニ物を覆ひ去
よ上せ漸くニ其火候成盛小して候をへし水銀
自切し其を多置きたる水中ニ滴入を致す其
滴入をへしと止きたるハ其水中なる水銀を取り
集め貯ふへしられ最も純精の水銀なり

製黑色子ラトルモトル法

これ水銀と硫黄粉或ハ硫黄花と以て製するものなり其法種々あり第一法ハ硫黄二分水銀一分を以て第二法ハ硫黄水銀各等分を以て第三法ハ水銀四分硫黄三分を以てす此註三法の分量今専ら世に用ゆるなりと此二品と合せて製するも亦三法あり第一法ハ火氣を以て第二法ハ少く火氣を用ひ第三法ハ大く火氣を用ひ鑄して

製を左の如く製するも亦其法あり

第一火氣を用ひさふ法ハ右の二品を合せ石臼

に入きて水銀の見へさう程に至るまで磨り交

ゆふたをかり

第二少く火氣を用ゆる法ハ精潔の鍍白と硫黄花と入きて火を上げ鍍化をへし化すたうハ大を下し而して水銀を皮に入れく此中より瀝し入まじり火を暈め以て磨り交ゆふたり此法前法

より勝まじり

第三大は火気燄用ゆる法ハ最初ハ水銀と硫黄
と燄交和しこれを陶器に入其硫黄の粒をな
したるものハ火燄貼して絶へず攪勻を急し然
るるとハ水銀と硫黄と混和し其餘分の硫黄ハ
焼散をかり尤も其火強く燃へさる様ハ心燄
用うへし若し其燃るると甚すおれハあまし就て
水銀も殆んど銀末の如き色ハ変り且共ハ焼

散をれハなり右三法の中にて第二の法を良

とす又二品調合の分量も前の第二法燄良

と自註ハ曰斯の如く製したるハ其

主治内外より用て年久しく深深したる疹癬硬

腫悪性膿瘍梅毒及其他の病ハ良し又よく臭を

殺を発汗劑ハ加へ用ゆるハよく発汗し下劑ハ

加へ用ゆるハ甚らく下を大人ハ分量六七厘

より一分六厘の間を用ひ小兒を急ハ四厘燄度

とす毎夕六七日の間服用を一と自註煖一日銀朱
の法ハ銀朱の
條下ニ記あり

製白ペルシピタート法

精潔の水銀四十八錢を強水又ハ硝石の精
気八九十錢の中ニ投して暖室ニ置く一十解化
を多かり化去一ハ其上ニ強気の鹽水一加ふ
へ一然ると死ハ白粉沈底を一なりされニ數度
熱湯を注き入れて其鹽気洗ひ去る一而後

其粉紙上ニ移一微火ニ炙一乾一て貯一ふ

主治吐瀉劑ニ用也粘液病梅毒瘡ニ功あり分量三
厘一り一分を度とす最も外用塗一茶一用ゆふ
と多一即搔痺疥癬頭瘡惡瘡惡性膿瘍煤瘡及以
他皮膚の諸病一良一

製赤ペルシピタート法

精潔水銀四十八錢硝子製の「マ」トラス一の類一を

は入れ其上は強水又ハ硝石精気八九十錢を加へて水銀を解化をへく解化したるハ火の上せ漸くハ火を増し降煨をふと紅色は変るる程度と以既に紅色は変したるハ火を下し冷して其マトラス破打破るへく即紅色ベルレピターは九五十六錢を得る一法は強水中に解化したる水銀をレトル止し移し適宜の火の上せ其強水は蒸散し而後ハ火勢は盛にして解化した

る水銀の紅色はなるまで降煨をるなり此外も亦法あるなり

紅色のベルレピターは侵蝕をふ性あり故に軟膏及塗茶は調和し腐肉息肉硬腫等を治せんを為めは専らこれを外用を甚功あり又悪性疥癬小瘡頭瘡悪性頑癬の疾病等此他皮膚の諸病は良し其功白ベルレピターはよりハ大に勝れりこれをバシリキユム膏は調和し貼をれば悪性

の諸瘡及腫物の毒気除去り良性の濃膿を生せしめ最も奇功顕著すなり内茶はこれより猛烈の勢なる故に微瘡を治する飲劑の外は用ゆるとれこれれも分量ハ甚微少なり

此赤「ペルシポター」は以て又一種の茶器を製造するとあり名て「アルカニウムコラルリニウム」と云られ其侵蝕する所の性を大に和したるものなり其製法ハ紅「ペルシポター」を極末に磨きこ

きと上品の焼酎を以て二三度も洗ひ濯きて「マ」トラスに投入し煨を然ると此ハ強水の酸気或ハ硝石の精気去て甚と和らうよなるこれ即ち是有り病症は因てハ赤「ペルシ」。

功をなすあり

以上紅白二品の「ペルシポター」ハ今世に専ら用ゆる所のものなり此二品の外は又種々あり製法右と異し一功能亦各格別を司る所あり故

よ爰よ又られを記す

製黄「ペルシピタ」上法

黄色「ペルシピタ」上ハ一名「エルペエム」ミ子ラ
レと「コロルリウス」人の命セー名好リ製法
種々あり

精潔水銀八錢純精硫黄油十六錢と成合せレト
ル上よ入れ火よ上せ煮るへー白色鹽の如く塊
凝したる色の残るなりあれよ清水成投まると

爰ハ直よ黄黄色よ変ず此水成去る又清水成幾
度も其水よ味のうばりさふ位よ至るまで扱
換へて洗ひ灌くへー而後よ紙上よ移しよく乾
して貯しへー但し硫黄の油ハ「コロク」の器物を以
て製し得る故よ甚よ高價なり然るよ丹礬油ハ
性質主治相同しきり故母これ成代へ用て良し
其法左よ記を

精潔水銀十六錢純精丹礬油三十二錢成交和し

「トル」に入れ乾く迄砂火上より於て蒸散せしむ
む一々既よ蒸散したるハ雨水或暁々以て数度
洗ひ灌ぐ一々其洗ひ灌きたる水の味常の如く
よなるよ至らハ其黄色粉を取て乾し貯よ一々
主治都て白色の「ベル」ピタ一と相同し微瘡
及ひ頑強なる悪症の病又吐茶よ用ゆ分量四厘
より六厘の間或用也但しこれをを用ゆるは心
成用並べ長最初ハ必き大母吐瀉を而後よ涎を

吐きよなり水に散るは蒸散す影の影は桑
黄色又鬱金色の「ベル」ピタ一は水銀を強水
又ハ硝石精よ解化しられは葡萄酒石の油を加
へて降煖をよなり又強水よ解化したる水銀よ
暁々尿域加へ降煖をよるときハ肉色の「ベル」
ピタ一よを得る即「ベル」ピタ一よの色ハ加へ
て降煖をよ物よ因て其色を異よ一又其主治用
法を異よをよなり

製綠色「ベルレピタ」法

綠色「ベルレピタ」ハ「メルキユスプレシポタ
エムヒリデユスト」云ハ又「ラセルタヒリ」#イスト
も名ク其製法左の如ク

精潔水銀八錢硝石精十六錢の中ニ投シテ解
化シ又ラレヨ「ア」チモニ「サ」三四錢を加ヘ共ニ
解化をられを首の長キ硝子の「レトル」ト入れ
火ニ止せて水気成悉ク蒸散シ濃色の煙氣發を

るまで煮尽ヘシ而後ニ火成下シ「レトル」トの底
ニ残リ所の物を取リ冷シ細末ニ搗キテ貯ムヘ
シこの「ベルレピタ」トハ最も痲病の奇薬ト云
分量ハ七八厘の間を用也必を吐瀉を
又一法ニハ右の強水ニ解化シタル水銀と鹽精
ヨテ化シタル銅と成交ヘ共ニ「レトル」ト入キ
前法の如クニ蒸散セシむるなり

製猛升汞丹俗ニ「ソルピル」の法

此法製するの法種々あり然れども爰は其
の良法を擇て示す

水銀三十二錢と良品の強水六十四錢の中
に投して解化をへし化したるは微火に上
せ水気悉く去り乾きたる粉末となす
まで是を蒸散せしむへし而後
は同分量の海鹽を火の上
に於て交へ攪勻をへしよく混和し
しハマトラすを取
り凡其三分の一の所を
此の交和したる

巨のと以て満ち紙で其口を塞ぎ砂中
に投し漸く火を盛し水銀悉く上
り着くまで煨升をへし

又法

水銀三十二錢に強水六十四錢の中
に化し其を「コル」の中
に投し微火に上せ悉く水気
の去るまで徐々蒸散せしむ
へし而後これに煨化し
白色となしたる丹礬及海鹽
各四十錢を加へ

これを破璃の「コル」に「入」き「焼」を「覆」ふ「微火」を
以て「升」煨を「一」

又法

強水は水銀を投して解化し、水を冷やふ地は安
まふと記の自のう束針紋状をなしたるものを
生を水と取り其四分の一程の食鹽を加へて揉
み合せられと右の束針紋をなしたる水を除きた
る其餘分の水のと水共は破璃の「レトル」に「入

を微火の上せ前法の如く煨升を「一」水法にて
製したるハ其侵蝕を水の功稍前法にて製した
る水のよ劣るなり水他製法種々あれとも右の
記を「所」其中は於て良法なり「（以下文字は不明）
猛升汞丹の質ハ昂鹽中の酸気にて水銀中の液
汁濕気を除きて乾し而して束針紋状となし
たるものなり水ハ酸気最烈なる故に膏は侵
蝕を水の功の甚しきものなるす尚水銀の微蜜の

気混和存在をさう故に諸毒の長たり乃これ成
一厘五六毛を用ゆふときハ壯健の人といへど
も即時に茶劑を服せされハ死するなり然きや
已亦これを種々の法に因て再ひ製をるときハ
毒氣去りて少も危を免き一の奇茶となふ即甘
升汞丹及ひ此他の製茶の如く然り
猛升汞丹ハ都て外用腐茶に用ゆ即疣腺の硬腫
水總様肉及ひ難治の硬腫等を治し又久しく治

せざる膿瘍を清除を以て用ゆふなり
此外これを用て甘升汞丹自註は日製及ひ此
イユハシシナバリスアランチモニアクワバガデ
ニカ及此他の水菜成製を煉金家及煨匠皆ち色
成用ゆなり石灰汁半筋の中は猛升汞丹五分
を投をふときハ其灰汁忽ち黄色に變を此をア
クワバカデニカ師侵水と名く久しく治せざる膿
瘍を除清し且愈をためよ用ゆ

猛升汞丹五分と蕃薇水九十六錢と以て交和したるは「ヘルニルリ」人の「アクワ」井ヒタと去よ又「ブレイキワートル」ともつゝ有り疥癬及び其他皮膚の諸病に専ら用也

或曰猛升汞丹ハ礬石を加へて偽造をへし即其法ありと然るは「子ウマ」君田此説非有り礬石と水銀とハ升煨し合躰せしむ能ハ寸且束針紋状の物となす然れハ怎んぞ礬石を用て以

以て偽製をふと以て得んや右も細末とてなりたるハ調和をへしと云ふも亦非なり

解猛升汞丹毒法

前件略云よ如く誤て猛升汞丹以て腹中に入ると時ハ危き害をなす其毒礬石よりハ猛烈なり如何とされハられ、腹中に入ると死ハ直ニ臟腑を侵蝕を故と死をなす若し人誤て礬石或ハ猛升汞丹及び其他斯の如き侵蝕をなす毒気あり

物を服さざらば直に年久しき成経たる油或ハ
新製の牛酪或ハ古き豚脂等の類を服せしめて
吐瀉せしむるに成類ハ其毒気を上下より送り
出さぬにやうす尚其猛烈の気成寛め薄よと
ものなり而後三日の間ハ猶温なる新乳汁を飲
ましむべし但し右の脂油ハ時刻を移さず即時
は用ひされハ死を多かり

製甘升汞丹法

甘外汞丹ハ右の猛升汞丹以甘和したるものな
る即成アキラアルバ^ハツトアトレ^ハトアツイ
ウズウレスチスパンセイマゴキユムミ子ラ^レ及
ヒバンセイマゴキユムケ^ハラタ^レとも云ふ製法
種々あり然れども爰ハ唯其最上法成示す
猛升汞丹八錢これハ生水銀六錢又ハ八錢を
を加へて平滑なる硝子器又ハ石臼に入れ水銀
の黒色又ハ微黒色となりて粒の見へざる程に

至る迄これを磨し合を一つ自註の日用ゆこれ
も尤もこれ二三滴の水を加へて磨を可し其
気鼻口より入るとれ既よく混和したるを
相應なる大き母して餘り長らさむとも廣き
口の「ヒョール」の類又ハ燧升をくき器に入
其蓋を固く覆ふ其入れたる茶劑の高さ丈
砂中ニ埋め合茶の高よく混和する様ニ初めハ
微火を以て漸く火勢を盛より終よハ十分

と烈してするると然ると此ハ甘升末「ヒョール」
の上の方ニ附着を而後ハ火を消し其器を冷し
其上ニ附きたる末針紋をなしたるものを取
へしこれ即甘升末なり但しこれハ尚生水銀
附着してありと取り去るハ除き去るへし又其
器底ハ紅色の粉末ありとありたり都て升燧
を十分と十分と取り去ると此ハ其甘和を十分
ありハ高侵蝕を多毒気存を多かり故にこれ等

ハ再ハ右の如くして升煨をハ即升煨をふと
再三ハ及ひたるものハ菜用となして最も功あ
り其升煨をふとの度ハ重ある程瀉をふの功ハ
薄らき発汗せしむふの功ハ強くありなり
右の如くして八九度も升煨をくく甘汞丹ハ最
も甘和なり是を名て「バナセアメルキユアリ」と
云ハ或ハ「カロメラシ」と云ハ或ハ「カロメラシト
云ハ或ハ「メルキユトリユステルシス」并ヤ「ホレテ」并「キユ

ス」と云ふなり是は諸症の瘦削病に用ゆると
き其奇功を顕をと人慮の上ハ出ふ又他の適
宜の薬剤ハ加味し用ゆるときハ右の諸症の妙
薬なり上品の甘汞丹ハ都て白色ありて微少の
黄色を含ま塊疑し且少く透微したるものな
り少くても辛辣の味ハ何れ物ハ悪くある
善悪を探索せんハ石灰汁又ハ鎔化したる
葡萄酒石の油に投じて試むハ其液汁の色少

も黄色よ変せざるものハ良しとするなりこれ
ハ甚と和らがる瀉茶あり他の瀉茶よ調合して
九茶となり用ゆると凡ハ其功甚しこれを発汗
茶よ交和し内服をふときハ諸種の疥癬疥癬疥
行及び他皮膚の諸病を治す又よく諸症の梅
毒病よ用て吐涎せしむ又よく灸を殺を分量ハ
患者の年齢病毒の多少よ因てハ厘より二分四
厘の間を用ゆ〜和ら瀉をなかり軟膏或ハ脂

油の類よ加へて外用をるときハ皮膚なる諸症
の病疥癬悪性膿瘍を治するの良薬と凡ハ
甘汞丹及び他水銀製の薬を吐涎剤よ用ゆ凡
の法ハ梅毒家よ任せて爰よ略記を而して左
バロンハンズ井イテンあり者の發明せし諸症
の梅毒を吐涎せしむるとあり〜て忽ち治する
猛升汞丹の製法を示すも此ハ譬へ血脈神経骨
節等よ侵徹したる悪症の諸梅毒といへとも法

し隨ひ適宜に製し程よくこれを服せしむると
此ハ即時に全く治せられ新に發明せし水銀の
妙徳なり

前記を八九度升煨したる甘汞丹も水気粘液
悪性液等より生ずる梅毒病内塞病敗血病水腫
病鶏腫腺腫頑硬結腫疥癬頭瘡灸症寸白灸瘡年
を経たる膿瘍等を用て甚く功あり分量ハ八厘
より五分迄の内を用うへし尋常製の甘汞丹も

用法良きと此ハ斯の如き功をなすといへとも
教度升煨したるその大に勝るべき事既に御

斯ス微ウ天チ人ヒ所ト發明用水銀製梅毒病茶法

名譽のハロンハンスウ井イテ此ハ天下の人民
救ふ事し絶へるを思ふを勞し意城注きし終に
梅毒病を治せしその妙法を發明せり即左に記
す此を用ゆると此ハ吐涎をなくして其病
全く治せり

精潔の猛升汞丹一分九厘二毛或一百九十二錢
の麥酒中へ投して一杯つゞ或サフラズを
茶の如く煎きたる汁や又ハ金剛刺根や或ハ
槐の煎汁小とんぶり一杯の中へ入て朝夕服
を

若し病者麥酒を好まざるハ他の茶水と調和し
用也一即汞丹一厘六毛ハ水或ハ麥酒白註
莖露莖露罐の十六錢の割を以て調合を急し但し其
露水と云

調和をふ所の茶水ハゴトセニリイの汁を加
へて色成着る用て良し

此茶劑にて梅毒病の全く治せしむハ殆んど吐
泄劑を用ひし如し自註下は日尚梅毒病然と
も茶劑の製法悪き乎或ハ用法の宜らざるとき
ハ猶吐を吐きたり故に宜く注意を一一若し
られし吐泄を至らハ隔日は瀉劑を用也
一患者此服を二三日の間ハ暈して寒

へさる様よを

此法ハス^ウ井イテ^レなる者發明して「ロント」^{名地}

の名醫「レル」へステル^レなる者^レ傳へり即此「レル

へステル^レの著書茶品主治実試篇と云ふの第二

卷及ひ此他諸邦の日録にも載せたるなり此茶

ハ一二年の間絶へを服しては少も害をあること

絶へくなく

此茶よてハ梅毒病須更よとて治せらるなり尤も

食禁戒正しく守り身を慎み常に服よして居る

と記ハ其功尚著く

斯の如く此茶は妙功あり然れとも已う拙工は

因て此妙茶を悪く誹るも何り或ハ已に利益を

得るもの少からんと或恐ま^レ誹るも何らなり

其徒ハ皆吐涎薬は^レ何れハ梅毒病ハ治せら

るのにあ^レをと云ふなり即「ロント」なる鄙賤

の徒亦在てハ絶へく此茶は信用せらるるものなり

都て皆容易に治せし且苦悩甚しき吐瀉劑を信
し用ゆるなり

此茶を水に投したるハ甚と安全にして且容易
なり孕婦乳子共ニ用ゆへー但し此茶に用ひ試
むるニ麥酒に和したるもの其功大ニ勝なり

此ス井イテシの法の如く汞丹を内服するとは
醫生の「ユンニツキ」君も共ニ發明せり即「サン」君ホ
ル上公君の世ニ公行せし窮理醫術論の中ニ載

せたり

汞丹ハ我邦にて價年々常用の藥品なり然るに
此妙功あふと知らざりしハ豈奇なるらん
や古法の吐瀉茶も右の「ス」井イテシの製茶と其
功相同し然るとも吐瀉をるを甚しく患者の勞
悩亦甚し然るニ「アムステルダム」^地の養病院ニ
てハ尚今も梅毒ハ古法の吐瀉茶を用ゆれる
也但し病毒の厚薄ニ依て右「ス」井イテシの製茶

功なきとあり然れども此薬の功なき症ハ古法
の吐涎劑以用ても猶功をなさず教るり

布連吉ハ「五」子止の瘍醫なり此人亦吐涎せし
布連吉ハ「五」子止の瘍醫なり此人亦吐涎せし
布連吉ハ「五」子止の瘍醫なり此人亦吐涎せし

ひるとなす水銀茶を用て梅毒病治する法を
考窮せり即其られし用ゆる水銀ハ最初少し
の「アラヒヤゴ」に溶しられし和志するを此を
其化しするもの此茶汁軟膏及ひ其他の藥品

よ加へ用ゆるなり此法ハ千七百六十八年和戎五明

子年戌は著せし書中ハ載せたり水銀と「アラヒヤ

ゴ」トハ甚とよく混和するなり

水銀一錢「アラヒヤゴ」ニ錢共は右白は入れ少

しく地綿水に加へて水銀の見へさる程に至る

まで磨り合をへし其上は「ケルメ」の樹木を以て

製したる蜜四錢地綿水六十四錢に交和して貯

へ置くへしこれを單法の「ク」井ギミキス「ユ」ル

と名く毎朝夕ニヒツ、或服せしむへ、又こうせ
し「バルサムの類を加味して施さんと欲せハ「バ
ルサム、コッバイ、ヒと「アラビヤゴム」と和し置き
ちれを毎度は五分つゝ加ふへ、
斯の如く製したるを用て「ク^{水銀}、^蜜、^{ロフ}及「ク
^ギ、^{バル}セムを製をへ、最初は水銀と脂と或
和したるハ「^{ユン}、^キ、^{ユン}、^テ、^{ユム}、^{ユラ}、^{サリ}、^テ、^{ユム}」及或他の
薬剤よく混和をなすなり、^{百六十八}、^年、^製、^法

此の布達吉の法を以て製したるを用て吐涎せ
さるゝと云ふとハ覺束るゝ即「^{ユン}、^ニ、^ツ、^キ」^人君の著
書に曰大儒「カムペ」^人諸門弟子の日前は於て
布連吉の法を患者は與へ試しに吐涎せり故
は或らう或布連吉は書通せしは敗血病及或類
の病症は用ゆむハ都て吐涎せと答へりとなり
然るに「^ス、^井、^イ、^テ」の法は製したるものハ或
症は用とも吐涎をふと最も稀きなり

布連吉發明の法ハ未_レ盡_ス不_レ可_レあり然れと
も其調和混交せしむるの法ハ甚_ク良_ク後世_ニ
至らハ人必_ク其上_ヲを發明_シ盡_スを_レ以_テ他_ノ水銀
製茶のトハ「_ニ」ニツキの著書_ニ詳_クなり

殺水銀法

製煉家及_ハ製茶家_ニて水銀を殺_スと云ふハ水
銀_ニ他物_ヲ加_ヘ其流動_ヲ殺_スの性質_ヲ除去_シ
未_レ審_クの細粒_ヲ分離_スとなり乃_チ水銀見_ヘを殆

んと消失_シたる_ニ如_クふる_ニ都_テ皆_チ粘氣_ハ何_レ不
物_或ハ脂油_ノ類_ヲ加_ヘ絶_ヘを攪_勻を_レハ自_ラの
ら細微_ノの小粒_トなりて更_ニ見_ヘを_レ程_ニ至_ラ不
尤_モ黒色_又ハ青色_ノの_レめと_ルなり
硝子器_又ハ小_キ名_白又_ハ茶碗_ノ類_ニ水銀_ヲ入
進_レ佳_品の「_ニ」_ニ加_ヘて木
棒_又ハ錢棒_ヲを以_テ絶_ヘを攪_勻を_レハ水銀
悉_ク微細_ノの小粒_トなり終_ニハ肉眼_ニて_ハ見_ヘ

さふものとならるり
クレメンテインの代よハ濃き豕脂牛酪及ハ此
外斯の如き類の濃き油或用て良し空心の時
の唾を用て此の如くして由死をふなり卵白卵黄
樹脂の類或用ても亦然り
脂油を用て殺したる水銀と朝夕程よく患所よ
塗るときハ諸種の疥癬搔痒及此他皮膚の諸病
を治せられよ擦りきり水銀ハ侵徹して周身よ

環を不潔の疥癬毒梅毒を不日よ拭て悉く表癩
の蒸気或ハ下瀉しめて除去せらるなり尤も一時
よ多く又ハ日久しハ絶へを用てを勿き擦る
にハ唯其患處のよ貼せし然らされハ涎と
吐せるとりり吐涎ハ唯梅毒病よ其要をな
り
此を綿布又ハ毛布よ少しく貼して髪虱又ハ體
の虱よ着くれハ忽ち消除せらるなり蚤を防ぐよ

ハ更ニ功なり

細末水銀法

流動な発を、性質の水銀液白子入まで搗き細末とれをと去ふてハ殆んと奇談に似たり然れとも水銀液硬く塊凝せしむると成るとは知れハ猶られと未とる得へし其塊凝せしむるの法種々あり左に記す

第一法 住品の鉛を鎔化よく化したるハ火

を下し冷をてし其冷て未き十分凝りさふ

前ニ化鉛の中央ニ孔を穿ち其中ニ細密の綿布

を布き其中ニ水銀を入るし硬く塊凝をるな

是此を取て搗くやし又し其味をさへ又器に

第二法 綿布ニ水銀を包えられを鎔化ししる

鉛の上ニ持ち翳をへし自のう逆流の質を失し

硬く塊凝をるなり此を取て搗き末をへし

第三法 一千七百五年 我室永 あり 學校の記

録よ一法を載せたり即水銀を器よ入れ密封し
六七十日の間絶へざる火上よ煨化を然ると死
ハ水銀硬き紅色の実體と変し且最初の分量よ
更ハ甚と重く有りたるなり而後よこれを未よ
搗き又生水銀の中よ投して混和せしめ又器よ
納め始免の如く晝夜絶ゆるとなき火上よ於て
煨化せると二三七日の間有り斯の如くせると
二三度よも及へハ水銀硬き実體となり尋常の

火気を以て煨化を可らざるものとなり
右の諸法を以て水銀を塊凝せし免たり其後
よ搗き細末と粉を一つ俵の底に盛置谷四十八

塊凝水銀法

緑青の細末或は鑪壺の底よ布きし隙に孔を造り
卵白よ浸したる綿布よ水銀を包みし隙を右の
孔中よ入て其上よ硼砂を置き而して其上よ又
少しく緑青を盛置其上よ細末の硝子粉厚さ一

二指横径許を入き而して鑪壺の蓋を覆ふ以綿
密に其上を塗里塞きて猛火中へ投して煨くと
一時然ると此ハ水銀自うく塊凝るるなり但し
火勢ハ漸くも猛烈増盛をへし

又法

細末の緑青及びよく乾きたる食鹽各四十八錢
水銀三十二錢取り而後へ燒錢を投し冷した
る其水を錢壺へ入れ火へ上せ其中へ右の食鹽

を鎔し而後へ同じく右の緑青を入れ化し鏝片
を以て絶へをこれに攪勻し微火にて煮去り徐
々へ煮るし其後へ右の水銀を入き加へ尚煮
るし中時而してこれを火より下し其紅色は
変したる鑪壺中の水を除き去り其水銀を洗ひ
灌き寒冷の清水へ投して数度凍凝せしむし
其後へこれを木造の盆へ移し寒冷の空氣へ當
て尚硬く凍凝せしむし

此凍凝したる水銀と鬱金根及び煨處の金煤各
寄合取られを鑪壺中段に互に厚く納め
固密に其蓋を覆ふ且塗り塞きて竈中に投し
始めハ微火を以て漸々火勢盛んし索籬
を以て火を吹き上げて煨くと九を半時許の間然
ると兎に壺中の物悉く鎔化を其化を別度と
して火を下し冷をへし此く製したるものハ其
用甚しく多しこれを以て膏茶を製し膿瘍及び腫

物等に貼して功あり

用水銀製銀法

礬石と食鹽と等分合せ砂火にてこれを煨
升をへし而其甕に附着し束針紋をみたるも
のくみを取り此他の粉未及び其底に残りたるも
清ハ除くへし而して右の束針紋をみたるも
のを取て又始の如く煨升をへし斯の如く幾度
もをらると其粉末の出で止むを度として止むへ

一又銀を水銀中よ投して化し火よ上せ其水銀
を蒸散せしめて洗ひ灌く一斯の如く幾度も
これを水銀よ化し蒸散せしむると其しきを洗
ひ灌く水の濁らざる様よるる或度として止む
へ一即精潔の銀粉を得るなり

其銀粉八錢と前よ云よ煨升したる礬石三十二
錢とをマトラスに入れ其マトラスを横よ居
て煨升する上よ看うする程よ至るまで幾度

も煨を一と自注ハ毎度上下轉例をへて故よ毎
度マトラスを打破然るときは終よ右の如く小
ふる一これを取て碎きマリイニバツトる蒸器を
名よ入れあまら悉く油の如く鎔化をよまで煨
を一
斯の如くするに及んば此の油の如くなり
るもの一分水銀四分を取り先つ最初よ其水銀
或鑪臺よ入れ而後よ右の油を入き火或徐々よ

増しられり悉く塊凝して鑪壺に附着せらるるまで
煨を一一斯の如く煨し了らばハこれを灰床
よ入れ鉛を加へて精製を一一即美麗の銀を得
るなり

令塊凝水銀至可鑄造法

前件示を所の法に随ひ鉛を以て先づ水銀を塊
凝せしむ可し而して後より是を打碎き強気の
酢に入れて煮るを四半小時而してこれを酢百

六十錢鹵砂二錢を加へたるも此中より投して
八日の間其儘に浸し置く一一自註の多少は日其水銀
及鹵砂も指而後其水銀を取り出し鑪壺に入
蓋を覆ふに塗り塞き微火上に上せ漸くに火勢を
増し鎔化を一一其脆き性を失せらるり而後
其水銀を取り出し大なる陶壺の底に硫黄を布
き其上に右の水銀を釣り下りて微火上に上せ徐
々よこれを温むるときハ下の硫黄悉く上の水

銀の附着をへし斯の如く幾度もこれを硫気の中
中ると此の水銀自のり鑄流をへし又槌を以て
打延ハすへき性と好まなり

塊凝水銀又法

緑青丹礬各四十八錢共は細末とるし新き錢壺
は強丸の酢を入きおれは右の細末に入れ火は
上せ煮るへし而其中水銀四十八錢は入れ初
めハ微火よして漸くに其勢を増し篋は以て始

終絶へす攪勻して凡ニ小時の間煮るへし自註

其酢減少したしハ又然ると此ハ悉く沈底をへ
新ハ入れ加ふと

し而後ハ大あろ陶器ハ清水は入れ置き其中ハ
右の沈底したるものを悉く入きられし混和を
たし不潔のものハ除去去らんを為し手と以て
揉み洗ひ灌き其水を入き換へ全く精潔なる
まで幾度もこれを洗ひ灌くへし而後ハ其塊を
たし水銀を取り出し綿布に包み其水気は除き

去りて潔白の紙上ニ押シ延ハ未全ク凝ラさ
る中ニ細ク綿密ニ断チ切リ去レを家外ニ出シ
風気ニ晒スと一夜然ルときハ其延シて断チ
る水銀鏡ノ如ク硬ク塊凝スなり

斯ク硬ク製シたる水銀鏡ニ鎔化シ且レ色を
染リんニは煨處ノ金煤及壽金名四十八錢共ニ
鑪壺ニ入れ交和シ去レを以て右ノ塊凝セり
たる水銀鏡ニ上下リ包ミ覆フ也一也一自註ニ曰ク最
上ニ下ニを

厚ク覆フ而シて後其蓋ニ覆フ綿密ニ塗リ塞キ
よく乾シ少シも間隙アリき様ニして上下左右リ
炭をうけ素蓋ニ以て吹きたを鎔化せしむると
凡ニ小半時餘而後去レを漸ク冷シ翌日ニ至て
鑪壺ノ蓋を開き見ると細ハ黄金色ニなりたる
ありこれを取て陶壺ニ入れ水ノ清むまで幾度
も入れ換テ洗ヒ灌ク而後ニ去レを少シく研砂を
霰ノ如ク切リ小キ鑪壺ニ入キ少シく研砂を

加へて金銀或鍍を如くして鍍しこれを型に
鑄入を一一これをを用て指輪糸索及ひ此他の品
物或製造を一一
此く製したる水銀ハ諸病に用て甚と功あり即
凡寒より湧出或瘰癧を最も婦人の月水
塞閉及子宮病に功あり婦人これをを用て後身を
慎よ用心せされハ忽ち指に貫く輪或ハ身は
纏ふ所のもの其色を変えり然れとも其病

ハ猶治を此を煮たる水の蒸を殺をを殆んと生
水銀を煮く水或服する如く
斯の如くして水銀或塊凝せしむ尚久外にも法
あり然れとも其法皆眞法にあつて見也既に
今右の如くして製煉家此法を塊凝せしむると
いへとも実ハ不易の硬き金となすこと知らば
固より此れを以て金銀を製するにハ更にいま
と明らざる如何とあれハ右に示す法を以て

製し硬凝したる水銀ハ皆年月を経るハ風散し
漸く一の無用の質と化されハるり

用鉛製水銀法

蘇落鹽一觔木灰四觔石灰一觔煨化したるゲイ
石二觔共ニ交和し此ニ蒸露罐にて引きたる酢
を加へる灰汁を造り其中ニ鉛二觔を投して解
化をへる灰汁既ニ白色ニ好きたるハ其ハ礬砂
八十錢或入れ化したるハ其液汁を悉くコロム

ハルズニ入る漸くニ火勢を増して煨をると
ハ逆流をる水銀少くともコロムハルズの受器
中ニ三十二錢或得るなり
又法鉛子器ハ人ハ蓋を固持し而煨ニ入る
鉛の鑪子屑一觔鹵砂三十二錢極末の赤瓦三觔
共ニコロムハルズニ入る煨くると六時の間ニ漸
く火勢を増し終ニ至て火勢を最も甚くると
但しコロムハルズニ附着をる受器ハ大ニ

て其中腹迄水放入き置く一水銀此中ニ集り
寄るなり

又法

鉛を取て薄く延ハ一色小此一倍程の食鹽を
加へ共ニ硝子器ニ入れ蓋を固封し而後これを
短くとも九日の間ハ土中ニ埋め置く也然る
ときハ鉛悉く化して逆流する水銀となり沈底
したるあり

泰西七金譯說卷之五 水銀說下終大尾

